

歌を聴いていると、その声がエラ(耳の下の空洞)近くから出てくるのか、上あごに沿って出てくるのか、口の中の広さがどのくらいなのかが感覚の中に見えてくる。またソプラノならソプラノ、テノールならテノールという領域の中で音が高めか低めかも聴こえてくる。つまり声の広がり具合で、音の幅が広いか狭いかが聴こえてくる。そこでふと思う。以前より声が太くなって音が安定したかのように聴こえるのは、高さがほんの少し低くなっていて口の中を以前よりも少し狭く使っているからではないか。つまり以前の音の膨らみを出せなくなった半面、技術は熟練してきているので、別方法でカバーできているのではないか。歌手は身体が楽器なのでいつまでも同じ声帯年齢を保つのは難しいだろう。若い頃は皆声が高い。しかしある年齢を過ぎると…すなわち女性ホルモン、男性ホルモンの比率が変わってくる年齢になると、声は低くなる。それをなるべく遠ざけるには完璧腹式呼吸で筋肉を維持しなければならない。全ての若さは筋肉の維持に通ず。ただ歌い手を見ていると息をため込める容量には個人差がある。ブレスはもちろん耳に聴こえるし、視覚上では服の上からでも肩と腹の動きでわかる。この個人差はどうしようもない。このレヴェルを超えるのが一流と言われる歌い手たちなのだろう。勿論一流の歌い手たちでも声の高さは年齢に準じて微小に変化する。そして「根っからの歌い手タイプ」即ち頭よりも身体で歌を覚えるタイプはその変化に強い。この変化に弱いタイプが転向するのに向いているのが、ベル・エポック期のシャンソン・フランセーズではないかと思う。何せ人生の味を出すには、低い声とため息交じりの表現が時には有効であるから。したがって年取ってシャンソンを歌いたくなくなったという心情の他に、少しは楽に歌えるからというのでも否めない。でも実際には本当に人生の深みを歌えている人は少ないのだけれど。そしてこんなことを考えていると、今度は楽器の方がいいなあと思う。楽器も手入れをしないと(音を出さないと)劣化するのは同じだろうが、少なくとも人間のように音の高さが経時的に変化するということはないだろう。調律により一定の音を保てる特性があるのだから。

そこで今度は思う。歌と楽器演奏の共演について。この二つの張り合いが度を越すとワクワクよりハラハラする。だからといってどちらかが必要以上に退きすぎても元気がない。退くと出るとがうまくバランスよく存在したら最高だ。あるときフランス某歌手のコンサートで楽しめたものがある。その歌手は自分の思い通りになるピアニストしか選ばない。成程と聴いていると、確かに歌を引き立てて弾いている、が…間奏や歌の強調部分でチョロッと素敵な音を混ぜてくれる、自信ありげにさりげなく。思わずピアニストに注目した。そして歌手の魅力も充分楽しめた。演奏者のこの柔軟性はやはり実力の賜物だろう。「歌も引き立てます、でも自分の音も聴かせます」

因みにアンサンブルを観ていると、誰の耳が誰の音に注意を払っているかも感覚に見えてくる。その音の駆け引きのキャッチボールが見えると連帯感を感じて楽しめる。

そしてある時感じた。最近の若い人は意欲のある人が少ないのかな？無難にきれいにまとめたのか世界が小さく見える。指揮者の要求するクレッシェンドが指揮者のアクションよりはるかに小さい。ついでに指揮者でなく譜面に感覚が集中しているのも見える。きれいな声は聴いたけれど何の歌を聴いたのかしら？何だかよく分らなかったけれど、とりあえず邪魔にならない何かの音を聴いたような気がした。(2013.5.30)